

反障害通信

11. 7. 15

28号

原発震災から4ヶ月

原発事故から4ヶ月になろうとしています。直後の反原発、脱原発の意見を封じるマスコミの対応がありました。ニュースステーションに出ていた朝日新聞の社員の解説者が脱原発の意見を言った翌日に撤回するなどという明らかな圧力がかけられたとか思えないようなことがありました。「そんな議論をする前に、事故処理に集中しよう」という意味不明の議論が続いていました。そんな制止をするなら、処理が済むまで、原発を停止することです。処理に当たる労働者や自衛隊の隊員、消防関係者を英雄扱いするような風潮は戦中の国家総動員体制を彷彿させる、「靖国の英霊」という論理に繋がる恐ろしさを感じさせました。

そこから、放射能の被害の大きさが明らかになる中で、世論のとりわけ、子どもをもつ親の動きから、やっとなマスコミがちやんと情報を流す中で、やっとな危険性が認識される中で、これからのエネルギー問題も含めていろんな議論が起こってきています。

まだ、危険か安全かという意見もでています。そもそも、安全神話というものを政・官・学・産・マスコミ（そして労働組合も）が作っていったということを押さえられず、そもそもスリーマイル、チェルノブイリ、そして日本でも事故が継続して起きていたことを隠蔽し、風化させていくことがあったのです。もっと言えば、原爆被害者の語りや、水俣などの公害問題を風化させる中で、安全神話が作られたのです。水俣のときも学者は汚染物質=水銀を海に流しても大丈夫だとか言っていたのです。今回の原発事故の際も、「ほとんど影響はない」「安全です」とくり返していた東電・政府の対応と如何に似通っていることでしょう。

そして、反対者がきちんと反対の運動を起こさない中で、見事な世論操作がなされていたのです。それは反対の立場を持ちつつもきちんと運動を作らなかった、わたし自身の自己批判をなしきる問題でもあります。きちんと意見表明し、運動を作り出していく必要を感じています。

やっとな、マスコミの規制が解かれました。でも、原発のある地域が落とし頃込められた原発依存の体制から、定期検査で止まっている原発の再稼働を地域自治体が求める動きが出ていますし、電力会社の収益を維持しようという思惑から、停電の恐れという脅しをもった再度の世論操作の中で原発の再稼働の策動も出ていますし、そして時間をかけて放射能被害の恐れを風化させていこうということも見られます。そして財界の電力料金の高騰は資本の海外流失をもたらすという主張も出てきています。

一体ひとの命に関わることに、金儲け=経済の論理を持ち出すことがどうして許されるの

でしょうか？

そもそも原発事故の際に、「放射能で誰も死んでいない」という暴論が出ていました。津波の後で、緊急避難という中で、救出されず死んでいったひとがいるということ spoil させているのです。また、放射能被害ということは、ずーっと後に出てくる晩発性の事が大きい、ということなのです。すぐには現れないことをもって、無視しようということなのです。原爆の被害の国で起きてくる議論とはとても思えないことを話しているひとがいるのです。

わたしたちは、この国の政治家や官僚や学者や財界、そしてマスコミのひとたちのなしてきたことを検証しつつ、あたためて、自分で問題を押しえ、考えていく、そしてきちんと自分の意見を表明していくことをなして行かねばならないと思っています。

さて、管政権の迷走が続いています。管首相のブレのようなことが批判されていますが、そもそもこのひとは市民運動家としての自分の出発点を忘れてしまい、官僚たちや他のごちやませの民主党の党员や様々な圧力の中でブレにブレつづけているのです。

この議論と平行して、「障害者」政策での議論が官僚主導の中で、おかしな方向に流されていくという事態も起きています。

これらのことを考えていくとき、国会での議論にも働きかけていくことは必要ですが、マスコミも動かしていく、むしろ草の根からの議論と運動こそが必要なのだと改めて感じています。

この間のマスコミの転換は放射能被害が拡大していく中での、地域住民や、そして遠く離れていても、体内被曝も含めて食の安全というところから、子どもを持つ親の立場から発言していくひとたちが出てきています。

まだ、訳の分からない議論を持ち出すひとがいます。たとえば、飛行機が危険だからといって飛行機に乗らないのかという推進派のレトリックがありました。これは良い例です。飛行機は落ちてでも、乗っているひとのリスクの問題や、落ちたところでの被害です。でも、原発は事故が起きたら、膨大な地域に影響を及ぼし、地球的規模の事故になります。飛行機は止まり、燃料を抜けば危険ではありません。でも福島第一原発の4号炉は燃料が抜き取られていたのに、爆発を起こしました。そして廃棄物は人類の歴史と同じぐらいの間管理しなければいけないのです。

そもそも核エネルギーは原爆という殺戮兵器として開発されたもの、リスクの大きい、というより、リスクの固まりそのもののこと、「平和利用」などすべきでなかった「悪魔の技術」なのです。

完全な科学や完全な技術はない、何かあったときに取り返しのつかないエネルギーは使うべきではないのです。

今、ストレステストの話がでています。ストレスという概念を拡大していくと、危険なものを扱うというところでのストレスという話もあるはずですが、ストレスがある故に判断を誤り、それが事故を引き起こすということがあります。チェルノブイリの事故は人災といわれていますが（実際は構造的なところから来ていますが）、そういう側面もあったのではないかと思います。また、放射能への恐怖というストレスが日本のみならず、世界を覆っています。そういう拡大した意味で言えることですが、ストレステストを必要とするよ

うな技術は使うべきではないのではと思うのです。

ストレスということで、考えていたことがもう一つあります。この社会はそもそもストレス社会なのです。最近自己破滅型の「犯罪」ということが多発しています。かつて重罰化で抑止するという主張をしているひとがいたのですが、むしろ重罰化によって、余計自己破滅型の犯罪を助長するというような風潮さえ出てきている現在です。そもそも「犯罪」と言われることの多くはこのストレス社会の差別の反作用としてあります。そして、日本においてオーム真理教のような破滅型「犯罪」というようなことも起きています。サリン製造でなく、原発攻撃というところで動くひとや、集団が出てくる可能性を考えているのでしょうか？ 原発の元である核兵器は、そのある場所を公開していませんし、軍隊によって厳重に警備されています。ところが原発は警備どころか、そこで働いているひとの名簿さえきちんと作っていないようです。

絶対、攻撃の対象にはさせないように警備をきちんとするということをしたら、コスト計算などでできなくなります。それに、そもそも9/11でペンタゴンが自爆型テロの攻撃を受けたことを考えていたら、もう、攻撃をするひとがいたら、お手上げだといふ言ひがありません。

そんなことを考えていたら、もう生きられなくなるというストレスです。

なぜ、そんなものを作り維持しようとするのでしょうか？

こんなこと書くこと自体が事件を誘発する恐れさえ抱かざるを得ません。

一刻も早く原発をなくさねばならないというところの思いを込めてあえて書き起きます。

もうひとつ、書き置きます。政治的判断の話が出てくるときにいつも出てくるのは、福祉の切り捨ての正当化の議論とか、小泉構造改革のときとか、ずーっと言われていることは、「国際競争力が落ちて、資本が海外流出し、国民の生活が苦しくなる」とかいう脅しです。

こんな話は、小泉構造改革が、格差の拡大を生み、生きること自体が困難なひとたちを数多く生み出していったということで、一体何のために競争するのか、もっと根本的に考えようという批判で反論できることです。

それにそもそも生きる環境自体が危うくなっている、日本に住めなくなるという危機感が出てきているときに、何で経済成長の話ができるのかという話です。こんな話をするひとたちは、資本が利益を求めて国境を越えていくように、日本に住めなくなったら、海外移住して何の負い目もなく生活できるひとたちなのです。

話が飛んでいきますが、原発の地域振興ということを麻薬にたとえる話があります。わたしは、この間の議論を見聞きし、考えていくと、原発の地域振興のお金は覚醒剤のようなことでしかないと思えるのです。放射能は体にいいとか意味不明なことを言っていたひとがいますが、それなら、覚醒剤も「一時的に体がしゃっきりする」し元気になるということです。でも、放射能が体にいいなんて話は、およそ、暴論のたぐいのことで、非論理的なはなしであるように、覚醒剤を体にいいとかいうひとはいません。

でも、一度はまると抜け出せなくなります。それは補助金という形で地域に落とされるお金がまるで、覚醒剤のように働いていくのです。地域は一時的には元気になりますが、

覚醒剤を求めていくように、その地域での原発の増設ということを自ら求めていく態勢が作られます。それに国全体としても、その比率が増えると電力供給の安定化の名のもとに抜け出せなくなります。フランスのように70~80%近くなるとどうなるのでしょうか。また、どうしても理解できないことなのですが、放射線廃棄物をどうするのか計画を立てないで、原発を作り維持していることがあります。覚醒剤をクリーンというひとはいません。各エネルギーも同じです。それは、建物自体が放射線廃棄物になることから、廃棄物処理ができないから、できるだけ長く使いつづければならないという、まさに麻薬患者の地獄的情况を生みだしていきます。原発をクリーンとっていたひとは、それが今でもクリーンと言えるのでしょうか。むしろ麻薬のように中毒一害になることです。

政治やマスコミは覚醒剤撲滅キャンペーンを張っていました。原発も、その麻薬的性格を押さえるならば、撲滅キャンペーンを張ることでないかと思うのです。

きちんと考えていくとこんなものは使えないのです。一刻も早く停止し、放射性廃棄物をこれ以上増やさないとすることをしなければなりません。

もはやいろんな議論がされてきているのですが、ちゃんと情報収集せず、掘り下げて考えてこず、発信もしていなかった事の反省から、これから、未だ続くおかしな論理をひとつひとつ批判していく作業の一端を担いたいと思っています。

(み)

読書メモ

震災・原発事故の後に原発関係の本を読み、そこからエコロジーということを欠落させてきたマルクス派を検証していくこともしていました。その間に軸にしていた障害学関係の本も読んでいます。またしばらくエコロジー的学習が続きそうです。それなりに基礎的なことを積み重ねます。

たわしの読書メモ・・ブログ 154

・高木仁三郎『市民の科学をめざして』朝日新聞社（朝日選書） 1999

専門性をもった科学者で、市民の立場から科学批判も含めてなしていくという方向。

S H E E Pというアタマ文字の内容 64P

左翼的な自己満足に陥りがちな運動と相手の土俵にのり埋没してしまう活動との間でのさまよえる子羊

プルートルーのもうひとつの意味・・金権政治 83P

核の管理はひとを殺す権利が必要になるという抑圧性と結びつく 183P

理科系と文化系という分け方自体の問題 191P

生き生きとした若い人の瞳 193P

この本は筆者の病気が発覚してから出された本で、筆者の振り返り的な文が出てきます。筆者の出発点は、社会的平等と社会的公平ということを求める気持ちがあって、反原発ということはあとからついてきた 206P

弱い人間としての出発点があるからこそ、仲間を求める。ただし、その仲間との関係で、

閉じた自己満足的集団に陥っていかないこと。209P

「自分がやっているのは自己満足ではないか」という自問を繰り返す姿勢 210P

自己満足に陥らないために①自己批判②わかりやすく語りながら(大衆的なところで)検照を受ける③日本というところに閉じないで、国際的に広げた検照 210-211P

高木学校への思い、7つ。

最後は危機感の中での「未来をとりもどそう」という提起 213-215P

たわしの読書メモ・・ブログ 155

・高木仁三郎『市民科学者として生きる』岩波書店(岩波新書) 1999

病床の中で作られた本。

自己史「ある時は時代の流れに実を委ね、流され、ある時は自分なりに抵抗しながら生きてきた」12P 「市民科学者」とは何か、・・いかにして、その立場にたどりついたか」16P

戦争体験から、国家とか学校とか上から下りてくること、大人への不信。自分で考え、自分の行動に責任をもつ 27P

学者たちの論文中毒 102-103P

賢治「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学をわれわれのものにできるか」120P

「職業科学者は一度亡びねばならぬ」123P

「見る前に跳ぶ」124P

自己批判的なところからの科学者の道①ドロップアウト②体制にとどまり矛盾と闘う③自前の科学・技術をめざす 125P

自前の科学から市民の科学へ 126P138P

「まず人間の関心のあり方を問題にし、その関心のもとに認識が方向づけられるプロセスを省察する」ハーバーマス 131P (フランクフルト学派 129P)

大学人の「大学の外に学問・研究はあり得ない」という発想批判 133P

武谷の「時計とかなづち」の提言と違和 164P

「死の灰の汚染という現実」から反原発に 199P

住民たちの志の高さ、そこから学んだこと 204P

「原発問題の中にすべてがある」216P-

理想・信条①人と人、人と自然が相互に抑圧的でないような社会であること②平和的な暮らしが保障されること③公正な社会であること④このような世界が持続可能的に保障されること 239P

「こんな時(危機の時)にこそ、わたしは希望について語りたい。あえて言えばポジティブに語りたい。人々の中に希望の芽を育てることのために、残る生のエネルギーを注ぎたいと思うのである」253P

「希望の組織化」255P

「あきらめから希望へ」258P

たわしの読書メモ・・ブログ 156

・早稲田 聡『図解 新エネルギー早わかり』中経出版 2011

自然エネルギーあんちょこ本。

原子力エネルギーと自然エネルギーを並列させている。福島原発事故前の本。

これからの産業としての自然エネルギーというところで、ナショナリズム的な論攷に陥っています。今年一月に出されたばかりの最新のデータであんちょこ本としてわかりやすい。ここからひとつひとつの精細なところにあたっていけるかも。

たわしの読書メモ・・ブログ 157

・島崎隆『エコマルクス主義—環境論的転回を目指して』知泉書館 2007

自然破壊の危機をどう思想的根拠づけるのか、「社会主義」の崩壊後、マルクスらの思想をどのような方向で再生させるのかという課題をもち、人間—自然関係、自然も含む「他者」への「搾取」、生命の維持と再生産という観点からエコマルクス主義—実践的唯物論をつきだしています。

マルクスにはエコロジー的なところがあったのか否かというところで、著者はおおまか肯定的ですが、もう少し深化した批判がほしいのです。

西欧マルクス主義の自然概念あたりとの対話を軸に広いところでとらえ返そうとしているのですが、認識論的な深化がいまひとつです。弁証法を法則としてとらえ、法則の実体化に陥っているとエンゲルスが批判されているところを一応押さえながら、なおかつ、弁証法を法則として援用しようというところなど、いまひとつわからないところがあります。廣松さんのエンゲルス論あたりの本を読んでいるようなのですが、その認識論的なところからの批判が著者に届いていないようなのです。廣松物象化論やポスト構造主義の反本質主義などとの対話からも、そのようなところはでてくるはずなのです。二元論批判はポスト構造主義が力をいれていたところ、著者の人間主義—自然主義という二項対立、そしてエンゲルスの対立物の相互作用論あたりを援用しているところは、まさに対立物というときの実体化として批判されていることからみると首をかしげざるをえません。

またマルクスの発達史観、進歩史観あたりへの批判がエコロジストからはでているのですが、著者には進化論への批判も出てきませんし、そのあたりの論攷を待ちたいのです。

また労働価値説あたりはその批判をコヴァルツィクの言説として載せているのですが、そもそも日本においても議論され、廣松さんが編集した『資本論を物象化論を視軸にして読む』あたりで展開されていたこと、そのあたりも届いていないようです。

それでも、自然概念を整理しようとしているところ、西洋での議論の細かい紹介など刺激的でした。いろいろ論攷を深めていく貴重な資料になります。

著者はポストマルクス関係の本も出していますから、そのあたりを読んで、もう少し対話を深めたいと思います。

たわしの読書メモ・・ブログ 158

・アルフレート・シュミット『マルクスの自然概念』法政大学出版局 1972

マルクスの自然概念を丁寧に追ひ、いろんな文献を押さえた、貴重な資料。

物質代謝とか非有機的身体とか言う概念がでてくるのですが、認識論的なところからのとらえ返しの必要を感じています。

エンゲルス、特に後期エンゲルスとマルクスの切断の問題も取りあげています。

この本を読みながら、むしろダーウィン進化論あたりから影響を受けた進化という概念から、発達なり発展という概念にとらわれていくマルクスの進歩史観なり発達史観あたりへの批判が必要ではないかと思ったりしていました。

『経済学批判綱要』、『資本論草稿』が哲学的かなり貴重な位置をもっていることも感じ、また読書の領域が広がっています。

たわしの読書メモ・・ブログ 159

・障害学研究編集委員会編『障害学研究 7』①明石書店 2011

障害学会の機関誌です。つづけて読んでいます。この雑誌には、学会の大会の報告が掲載されています。今回は掲載が遅れて3回分の大会の報がまとめて掲載されています。

その中に昨年の「障害学と障害政策—イギリスと日本の対話」のシンポの記録があります。

わたしが主題的に考えてきたことなので、とりあえず、これだけでも先にと読みました。

イギリス障害学のコリン・バーンズの公園と日本の障害学との対話が掲載されています。

イギリス障害学の運動への影響が過大評価におちいつているのではないかという思いも持ちました。イギリス障害学への批判に対して真正面から答えていないという思いがのこるのです。そもそもイギリス差別禁止法へも「社会モデル」がきちんと適用されていないというところの問題をどうとらえるのかということもあります。それでも、それなりに整理して出してくれています。「市場経済の中での・・・」というような書き方もしていますから、そのあたりの限界もおさえているのかもおもったりしています。

「対話」というテーマ、このシンポに推進本部の東室長が参加しているのですが、わたしはイギリス障害学の地平は運動をしているひとたちが自ら理論的なことも生みだしていったことにあると思っているのですが、東さんは自ら理論的な事を生みだしていく指向がなく、学者との分業の論理に陥っているようです。まあ、実務の中で時間がとれないのかもしれませんが。

ICFへの批判も出てきていて、安心したのですが、もっと掘り下げた議論ができなかったのか、との思いをもってしまいました。いつものないものねだりです。

たわしの読書メモ・・ブログ 160

・廣松渉『生態史観と唯物史観』ユニテ 1986

マルクスとエコロジーということで、過去に読んだ本を読み返しました。

第一部は雑誌『現代の眼』に連載された論攷。再々読です。わたしがエコロジー志向のひととの学習会で使い、廣松さんを最初に読んだ論攷です。ナショナリズム的な論攷の梅

棹『文明の生態史観』への応接から生まれた本です。梅棹さんの本は地理的風土史観の感があるとはいえ、その中に自然の規定性を一定とらえ返しながら、生態学の遷移理論を援用しつつ、文明を生態学的にとらえようとした本です。その応接としてのこの著は、マルクスの段階論を批判的に対象化しようとし、生態学の、「主体」と「環境」の相互関係として現れる、環境的自然の規定性をとらえ返そうとした廣松さんの意欲作です。『存在と意味』の第三巻のモチーフ（はしがき i）にもつながる論攷です。

二部は共同体間の交易と分業から格差—差別の発生をとらえかえそうとした論攷。再読です。わたしが反差別論で分業問題を論じるときに援用してきたことが書かれています。

付論としてエコロジー問題への提言「生態学的価値と社会変革の理念」・エコロジーとコミュニズムのリンクというべき論攷です。

ページを追ったメモ

人間主義＝自然主義ということはフェイルバッハ的とらわれの中から出てきている 32P
産業における人間と自然の媒介的統一 33P

「労働手段の“進化”」 49P・発達史観、進歩史観の源

一義的な自然規定ではないけれど環境的自然に留目 99P

「先には、弁別の徴表を変化それ自体の性格のうちに求めようとしたのであったが、弁別の徴表はむしろ主体的な関心の向け方に懸かっているのではないか。」 104P・歴史という概念は客観的事実としてあるのではなく、関心の向け方・進化という概念も同じ

ヒトの〈間主観的—自然的〉な生態系の遷移たる人類史 149P

変化の三つの内容 移動・変容・生滅 114P

自然的環境、社会的環境、表象的環境という便宜的な環境の押さえ方 162P

環境的場のベクトル 166P

生産という概念を広げる・労働手段—道具を使った活動 174P・交換というところから物質代謝というところにつながる

視座の転換 199P

贈与という概念・贈与物交換 213P

労働価値説への批判二部 2章 3項とりわけ 227P

贈答から共同体間交易が始まる 233P

平等社会という推測 241P

平等主義的輪番使用 242P

貨幣と威信財・呪物財との区別 249P

経済学的規定要因ではなく別の要因・平等主義 272P

覚え書き的な二部の主題・生産物交換の人類生態史、経済人類学 305P

効用と利潤の市場経済的原理が人間生態学的価値基準を忘失させた 313P316P

原子力発電問題 316P

エントロピー概念 317P

マルクス・エンゲルスの人間と自然との生態学的に調和した統一態勢というとらえ方 319P

人間中心主義とヒューマニズム批判 319-320P

疑問に思ったこと

生存競争へのとらわれ 129P140P

今西シェーレの生物学の援用(特にサル学)ただし今西進化論の評価が分からないのです。

自然と社会との物質代謝??161P・・・真に存在するのは機能的諸関係の一総体 161P・・・これこそ問題にすべきこと・・・自然への支配・征服もしくは自然との共生という自然と社会の二元論

進化論の対象化・・・発達保障論批判からの進化論批判・・・進化とはなにか・・・進化という概念自体が「先には、弁別の徴表を変化それ自体の性格のうちに求めようとしたのであったが、弁別の徴表はむしろ主体的な関心の向け方に懸かっているのではないか。」 104P という問題・・・「進化」という概念は「分化的展開」というとらえ返しになるのではないか

たわしの読書メモ・・・ブログ 161

・障害学研究編集委員会編『障害学研究 7』②明石書店 2011

急遽挟み込んで読んだブログ 159 の続きです。

学会の3回分の記録の3回目が 159 のシンポでした。

1回目第5回大会の記録は「障害学とソーシャルワーク」です。

これは障害学では、繰り返し専門性を持った者の援助と、その中にはらまれる抑圧の問題です。

これはわたしは単にソーシャルワークだけの問題ではなく、すべての専門性をもったひとと当事者・ユーザーとの関係として押さえ得ます。

そもそもピア・カウンセリングやセルフヘルプということを軸にしていくことも考える必要があるのですが、そこにおいても知識や経験値の違いによる抑圧の問題も出てきます。

ですから、わたしそもそも何のための活動かということを押さえたところでの、反差別というところでの、総体的なとらえ返しが必要なのだと思います。

また、医学モデルから脱し得ない現行の制度の中で援助する側が抑圧的な立場を持ってしまうという問題も押さえて置かねばならないとも思っています。

大会記録のもうひとつは、第6回大会の「障害学生支援を語る」です。これは学会ではめずらしく、支援を受ける当事者学生が3人、支援というところでは「聴覚障害者」「視覚障害者」支援がもっとも多いのですが、「発達障害者(ADHD)」「内部障害者(「心臓疾患」)」「精神障害者(「精神病」者)」という支援のあり方がまだ確定していない中で、協同作業として支援のあり方を探っていく、道行きです。もうひとつ、差別の中でのコミュニケーションがとれないまま生きてきたという意味でのコミュニケーション障害の問題をどうとらえていくのかの課題があります。もちろんこういう言い方をするとき、「社会モデル」としてのコミュニケーション障害です。そういう中できちんと要求を出していきます。学生当事者からの論攻が主ですが、ひとりだけ大学の中で支援のコーディネートをしている立場での論攻が出ています。大学の内と外で切れている問題をどうするのかという課題を出していることが印象的でした。

論文が7本です。

・今野稔久「葛藤への障害児教育—自己矛盾の経験から、「葛藤するストーリー」の記述

この論文は特別支援教育に組み込まれた教員の葛藤なのですが、読みながら感じていたのは、個人モデルに基づく個人モデルでしかない特別支援教育、その特別支援教育でICFが持ち出されたとしても、そのICF自体が個人モデルに環境という概念を付加した個人モデルにすぎないという特性を顕在化させているだけではないかということです。

この論文の「葛藤」ということは「より根本的に考えると、教育を含む、障害者の「生」は、障害者を、あつてはならない存在とする勢力とのたたかいをくぐって生き伸びてきたものである」140Pということに端的に表れています。教員はそもそも教育の意味をどうとらえるのでしょうか？ この差別社会への社会化ということでの教育において、そして、子どもの他者性の中で、また学校との内と外との分断の中で、「今、ここで」というせめぎあいを生きる教員の葛藤はいかばかりかと思うのです。

・矢吹康夫「「分かりやすさ」の抑圧—アルビノ当事者の問題回避の語り」

わたしは差別形態論につなげてマージナルパーソン論を展開してきたのですが、「アルビノ」と規定されるひとたちもまさにマージナルパーソンの問題を抱え込まれているのだととらえ返していました。

誤解を与えるようなことを書いているのですが、著者がマージナルパーソン論や、差別形態論を展開しているわけではありません。だからこそ、星加さんの文「だが、同時に障害学は、社会変革に向けた実践に熱心であることが、むしろ、抑圧的で暴力的な力をもつことに対して自覚的な学問領域でもある」を引用し「アルビノを被差別のカテゴリーに包摂するのを留保させる実践であることも忘れてはならない。」179Pという文が出てきます。マージナルな相対的排除の性格が強い差別は差別としてとらえにくいのですが、留保させる以前に存在する差別なのです。マージナルパーソン研究の中で出されるパスといわれる戦略のようなこともこの論文の中で無自覚なまま出されています。マージナルパーソンという概念をいれたところで改めて差別ということをとらえ返した議論を出して欲しいという、いつものないものねだりです。

・片山知哉「文化の配分、所属の平等—デフ・ナショナリズムの正当性とその条件」

わたしにとってデフ・ナショナリズムということはずーっと考えつづけてきた課題でした。そして反差別論を問題にしてきた立場でも、ナショナリズムは考えつづけてきた課題です。

この論攷はここでは出てきませんが「ろう文化宣言」が突き出したデフ・ナショナリズムが陥ったマージナルパーソンのひとたちへの抑圧性をとらえ返そうともしています。

さて、そもそもナショナリズムとは何かという問題があります。

民族とは言語と文化によって差別されるグループとして析出してくる、物象化される人たちという規定になるのではとわたしは過渡的に押さえています。もっといえば、差別があるところに民族が析出するのであって、差別のないところで民族という概念が維持されるのかとまで思っています。また、ナショナリズムは差別を総体的にとらえられない、きちんと総体的な反差別の立場に立ち得ないという傾向にも陥っていきます。

さて、著者は存在論と規範論の切り離しをはかっているようです。わたしにはこれがどうしても理解できないのです。そもそも差別とは何かということがとらえられなくなるのです。人権論批判にも繋がるのです。とりわけ、能力に基づく差別がとらえられなくなる

のです。

この論攷がとりあげようとしていることは刺激的なのですが、存在論を切り捨てたところで、社会的なところから差別の構造が生まれてくるというところがとらえられなくなるし、そもそも民族やナショナリズムがどこから出てくるのかの分析にも至りません。

差別をほりさげてとらえていくと、民族という概念次第を生みだしていく構造をとらえる、ナショナリズム解体の戦略までいたりつくのではないかとわたしは考えています。

・大野真由子「難病者の就労をめぐる現状と課題—CRPSの患者の語りからみえる「制度の谷間」とは」

難病ということで制度の谷間に陥り易いのですが、さらに理解が広まっていないマイノリティの「CRPS(複合性局所疼痛症候群)」ということの就労をめぐる論攷です。

これもわたしからするとマージナルパーソンの概念につながる論攷です。わたしはこの論攷を読みながら、そもそも筆者が解き明かそうとしてない、労働崇拜的なところをこそ、問題にし、それから生きる保障を獲得したところで、労働でなく仕事としてのフレックスなあり方を探っていくことではないかと思います。ここでも、痛みということで、社会モデル批判がでてくるのですが 245P、そもそも労働という社会的な関係性をめぐる議論なのだわたしは思うのです。痛みをどうするのかということは、モデルの問題でなく、医学の問題としては残るのですが、そもそも「社会モデルとは何か」という議論をきちんとやっていく必要を感じています。

・堀智久「専門性のもつ抑圧性の認識と臨床心理業務の総点検—日本臨床心理学会の1960/1970」

障害学が一つのテーマとして追いつけている「専門性のもつ抑圧」ということを臨床心理というところでの議論として歴史的にとらえ返そうという意欲作です。余談的なこととなりますが、その中に出てくる渡部淳さんが突き出していたことは、まさに障害関係論とも言うべき内容だったのだととらえ返しています。

・榊原賢二郎「人への価値付与と障害」

「社会モデル」批判をなしたモリスの文化モデルのようなことにリンクしているようです。モリスの批判は一定当たっていると思うのですが、根本的に「社会モデル」の意味をおさえていないのではないかと考えています。痛みの各私性とか、医学的な規定が「障害を障害者が持っているものとしてとらえる」—医学モデルと医学的実践とを混同しているとしか思えないのです。「社会モデル」は医学を否定しているのではなく、障害を医学の範疇に縛り付けようとしていることを批判している、医学の問題にする病の中に障害を繰り込めるのではなく、区別と連関を押しえようとしているのです。それとパラレルに能力を個人がもっているものとしてとらえるところから、個人的体験などという概念に繋がっていくのではないかと考えています。モリスを是非読みたいと思っていて、読んで一度きちんと対話します。この論攷はわたしの関心領域とかなりリンクする論攷なのですが、そもそもひとが価値づけられるというところがどこから出てくるのかの分析と批判が必要なのだと思います。

・青木千帆子「自立とは規範なのか—知的障害者の経験する地域生活」

自立をめぐる混乱があり「自立幻想」とでもいうべきことさえ生みだしているのですが、

この論文でとりあげているのも、そのようなことです。

経済的自立ということが押しつけられる構造があるのですが、それがどこから来ているのか、そして絡み合っている自立概念を整理し解きほぐしていく必要があるのだと思います。対象者になっているひとの自立をめぐる混乱というのは、学者の世界でも整理されていないのです。運動という形で開いていない当事者が健全者幻想に取り込まれている中で、混乱を来しているのは、学の世界にも通じているのです。

エッセーと書評もあります。エッセーは、それぞれの生と意思の中で出てくるのだと感じていて、もっとじっくり読み込んでいきたいと思いがあり、ちょっと簡単にコメントできなくてパスします。書評もいろんな思いが交錯してとりあえずパスします。

たわしの読書メモ・・ブログ 162

・広瀬隆『FUKUSHIMA 福島原発メルトダウン』朝日新聞出版（朝日新書） 2011

原発関係の学習に戻ってきました。

著者は反原発に執念をもやしてきたようなひとです。福島原発事故の直後に急遽出した本。

今回の事故の精細を書き、そして現在ある原発の危険性を地震との関係で精細に書き記してくれています。

ただ、テレビ朝日系列の「ニュースステーション」の原発をめぐる意見のシリーズの中で出ていたのですが、自然エネルギーでは安定供給できないみたいな発言をしていました。で、二酸化炭素排出による地球温暖化の問題に対する疑念があるようです。そこから発電分離で、エネルギー問題を解決できるという趣旨のこともこの本のなかで書いています。後日、一度読んで見ますが、何かそのあたりは違うのではという思いを持っています。

原発の廃熱を海に流すということが何をもたらすのかという論考が著者にもあるのですから、二酸化炭素排出が何をもたらすかのところがでてくるはずですが、どこまで科学知がこれだということを出せるかどうかの疑念があるとしても、分からないことはやるべきではないということがエコロジー的なところでの科学の最低限のまもるべきことではと思うのです。

たわしの読書メモ・・ブログ 163

・鎌田慧『原発暴走列島』アストラ 2011

著者は現場での取材を大切にするルポライターです。

労働問題と原発問題を軸にしたルポを書いているようです。

「ウソと不正が原発の推進のエネルギー」154Pだったということが鮮明になっています。この本も福島原発事故の後に出された本ですが、読んでみると、すでに事故は何度も起きていて、原発が危険なものとして分かっていたのに、事故や放射能の危険性のデータを隠蔽をして、立地するところにカネをばらまき推進してきたということがはっきりしてき

ます。

わたしはこれは覚醒剤みたいな事ではないかと思えます。地域を元気にすると称してカネという覚醒剤を打ち、ハコモノにしか使えないという交付金で、その維持も含めて、原発依存—中毒にした地域にさらに新しい原発を新設していくという構図です。もうひとつ、放射能と覚醒剤を類比し、覚醒剤はうまく使えば元気の素になる、原子力はうまく制御できれば有効なエネルギーだ—という論理があります。放射能も覚醒剤も医療で使われますが、そんなものは医療以外に使えばとんでもないことになるということなのです。

このような体制が作られたのは、マスコミの責任が大きいのではないかと思えます。事故が繰り返し起きていたのに、マスコミがちゃんととりあげず、むしろこのエネルギーがなくなると経済がなりたたなくなるという論調を流し、世論を操作していたのです。今回の事故が起きた直後も、脱原発の議論を流さないという姿勢がほとんどでした。それが放射能被害が出てきてやっと脱原発の議論の封印を解いたのです。まるで、手のひらを返すように。ちょうど戦後教育が手のひらを返したように転換したように。このようなマスコミの姿勢をみながら、マスコミがのど元過ぎれば熱さ忘れるというようなところで、またもや、反原発の議論を押しえ込んでいくことを恐れざるをえません。きちんと、言挙げしていかななくてはと思っています。

さて、この本は現場の取材ということでの、著者のいろんな取材からのルポはとても共鳴し得たのですが、障害問題を考えてきたわたしとしては、「奇形児出産の噂」という件は違和を抱きました。著者はそれなりの幅広さをもったところで論を展開してきたひとなのですが、著者には公害問題での「障害者」の存在を否定していく論調での公害批判への「障害者運動」サイドからの批判は届いていないのでしょうか。わたしはエコロジーということで、人間中心主義や将来の社会の人々への環境破壊ということを差別としてとらえ返す中で、反差別と言うところからのエコロジー的なところのとらえ返しの連携と深化をやっていく課題があるのだと、改めてその必要性を感じていました。

たわしの読書メモ・・ブログ 164

・高木仁三郎『原子力神話からの解放 —日本を滅ぼす九つの呪縛』講談社(講談社+アルファ文庫) 2011

1999年のJOC事故の後に著者が書いた本の再版です。

これは単なるミスではなく、そもそも原子力発電の構造に根ざした事故であるという主張です。9つの神話(呪縛)に対する批判として展開しています。高木さんの本の中でも批判が神話批判ということで整理されていて、わかりやすい本です。

神話は「原子力は無限のエネルギー」という神話」「原子力は石油危機を克服する」という神話」「原子力の平和利用」という神話」「原子力は安全」という神話」「原子力は安い電力を提供する」という神話」「原発は地域振興に寄与する」という神話」「原子力はクリーンなエネルギー」という神話」「核燃料はリサイクルできる」という神話」「日本の原子力技術は優秀」という神話

最後に「原子力問題の現在とこれから」というまとめと提言があります。何が問題か、貴重な資料になる本です。ただ、ナショナリズム的な論攻が出てきていて、著者とはほぼ

シンクロナイズしていたのですが、ちょっと違う面を見いだしてしまいました。まあ、全面的にシンクロナイズするなんてことはありえないのかもしれませんが。いつもの無い物ねだりです。

たわしの読書メモ・・ブログ 165

・『現代思想 2011年5月号 特集=東日本大震災 危機を生きる思想』青土社 2011

いろいろな観点からの「原発震災」のとらえかえし。

「回復不可能な破滅的な損傷を与える技術は放棄する」160P「原発震災」を警告してきたひとたちからの検証提起。

サブガバメント、災害資本主義、逆トリアージ、ポスト・ノーマル・サイエンスという概念からの展開などいろいろ興味深い論攷がありました。

最後に障害問題や他の差別の問題にリンクする論攷もでています。

マルクスのエコロジー論との対話で、「切り離された人間主義」という論攷 k

篠原論文「エコロジー論へ」ともう少し掘りさげて対話したいとの思いを持っています。

いろいろな議論がなされていたこと、知らないことが多く、自分の不勉強を痛感していません。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 28号」アップ(11/7/15)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリーを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされない方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

◆ブログのタイトルを変えました。「たわしの「対話を求めて」」

読書メモを軸にしていたのを、もっと自分の意見を出し対話を求めていきたいという思いからの変更です。

URLは <http://blogs.dion.ne.jp/hiroads/>

◆『図書新聞』3022号 11.7.16 に、すぎむらなおみ著『エッチのまわりにあるもの』解放出版社 の書評「性のタブー化が人を傷つけ合う関係にむかわせる？」を掲載。

◆「障害ってなーに？」脱稿。出版模索中。

お知らせ

◆ホームページは横書きのテキストファイルに近い形で作成しています。印字でうまく出ないとき、読み込めないときはメールで連絡ください。また縦2段組みで印刷したものもあります。こちらが欲しい方も連絡もらえれば、メール・郵送にてお送りします。

反差別コミュニズム論序説の序—反差別と階級闘争とエコロジー—

地震と震災そして、原発事故が起こる中で、わたしの中で、一つの大きな転換がおきました。エコロジー的な指向がわたしの中になかったわけではありません。また、反障害運動の立場から、発達保障論批判をし、発達史観・進歩史観への批判もしてきました。社会変革をめざすひとたちが、運動の成果の名のもとに、効率性・生産性の論理にとりこまれていくことの批判もしてきました（運動の有効性を否定しようとしているわけではありません）。そもそも生きる環境が破壊されたら、革命も何もないのですし、きちんとエコロジーという課題をとらえかえさねばならないと。

ただ、エコロジーとコミュニズムがなぜ結びつかないのか、むしろ外在的に赤と緑の統合というようなところでしか語られない現実がなぜあるのかということをとらえ返せずにいました。

今回の転換は、以前からあった反差別とコミュニズムが結びついていかないというところを批判してきたわたしにとって、そのことはエコロジーとコミュニズムが結びついていかないことにつながっているのだととらえ返しました。そこをマルクスあたりからとらえ返す作業をしてみます。

マルクスが抜け落としていたこと

『共産党宣言』の第1章は「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」という言葉から始まっています。

この書は政治的アジテーションの文で、どこまで理論的なことを押さえているか、押さえることが必要と思っていたか疑問ですが、それでも、マルクス／エンゲルスがそれぞれの書において厳密性を求めていたところにおいて、なぜ、このような書き方をしているのか疑問があります。今日のマルクス派の限界といわれることがこのフレーズに端的に表れています。

これは今日的にとらえかえせば二つの問題を抜け落としています。

一つは、階級闘争に集約できない問題があります。それは差別の問題です。フェミニズムが突き出した家父長制の問題があったし、人種・民族差別は直接には階級の問題ではありません。障害問題も階級という概念だけでは語れません。

むしろ階級という概念は差別ということに含み得ますが、差別は階級概念に包摂できません。

レーニンが民族差別を階級支配の手段としてとらえました。ここを一つの起点にして、差別の階級支配の手段論・道具論ということが定着していきました。そして、「個別」反差別闘争を階級闘争、階級形成への手段とする新左翼も含めた左翼の利用主義的な関わりに繋がっていきました。

この手段論は、そもそも階級支配は生産手段の所有からの排除という差別の問題であり、労働力の価値という物象化された相での能力による差別ということをとらえそこなうことにもなります。ですから、階級支配も差別の問題であるとおさえたとすれば、差別は階級支配の手段であるという命題は、「階級支配は階級支配の手段である」という意味不明の命題

を生み出すことになります。

もうひとつは、産業革命以降とくに顕著になった「自然の制服」「自然への支配」「自然との闘い」という錯誤の歴史を抜け落としているということです。

これはダーウィン進化論の過大評価から、発達史観・進歩史観・発展史観にとらわれていたという言い方にもなります。ダーウィンの生物の分化・展開のとらえ返しを、「進化」ととらえたことの問題です。

もちろん晩年マルクスは単線的な発達史観ということへの批判というようなことも織り込んでいました。

けれど、主流のマルクス主義者は生産力の発達を革命の条件とし、それを第一義的に単純に取り入れていきました。そのことはロシアの新経済政策（ネップ）の導入にも現れていますし、現代中国が「社会主義」を標榜しながら、第三者的にみれば資本主義以外のなものでもない、経済体制を築き上げていったことにも現れています。文化人類学的研究は、生産力が低い社会でも、差別を押しえ込む関係を築いていたことを明らかにしています。

三つの歴史

さて、差別のとらえ返しが欠落し、階級支配の手段論に落とし込まれてきたのは、マルクスが、かつての言葉で言えば、資本主義が帝国主義として生き延びていくということをとらえられなかった、という批判にもリンクします。それは要するに、継続的本源的蓄積の問題なのです。それは別の言い方をすると本源的蓄積的収奪を継続させることなしには資本主義は崩壊するという問題で、差別が政治支配の手段としてあるだけでなく、差別なしには資本主義は継続し得ないということなのです。

そして、そのことは自然からの収奪としての自然破壊、未来世代の資源を収奪し、生きる環境を破壊していく、資本主義が陥ってきた習性ともいえることがあります。もちろん、いきられない環境になれば資本主義もなにもないところで、誰がとらえてもそうになっていくととらえられたときには、動き出すのでしょうが、そのときはすでに遅し、ということになりかねません。そういう意味でも、この差別の三角形の構造に、資本主義的差別の構造に一刻も早く終止符をうたねばなりません。

このあたりのことを図として表せば、図1になります。

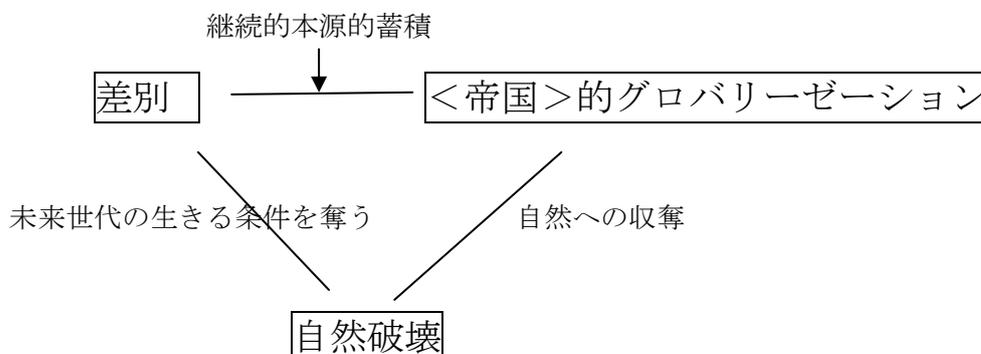


図1

反差別と反資本主義（階級闘争）とエコロジーの三角形

さて、これを共生ということをキーワードに運動的に反差別の三角形として示してみます。

反差別を、階級支配というところからとらえ返すと、資本主義的収奪と搾取の停止というようになります。これは共時的共生ということばでも表すことができます。

そして、反差別とエコロジーをつなぐことが自然との共生(反人間中心主義)ということです。実は社会と自然の共生ということは二項対立的な錯誤で、社会も自然の中にあるということで、むしろ「自然に適う」ということで突き出していくことですが、ここでは共生という概念で三角形を作っているのので、一応こういう形でおきます。

そして資本主義が利潤追求の中で環境破壊をもたらしていくということへの批判として、未来世代との共生として、エコロジーとの連結がでできます。

これを図に表すと図2になります。

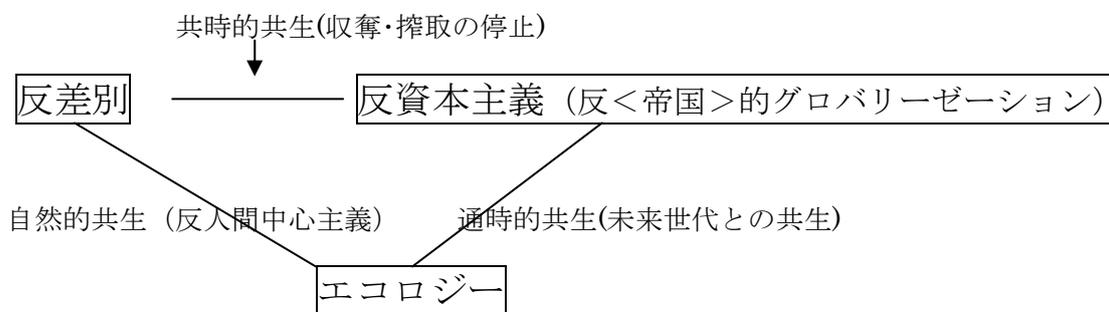


図2

反差別の三角形の連携を妨げていること

さて、もう一つこの問題のとらえ返してとして、どうしてこの三つの課題が結びついて行かなかったかの分析をしておきます。

これが分析課題として大きな問題になってきますし、実践的にもどうつなげて行くかを明らかにすることにもつながっていきます。

まず、わたしがこれまで主要な課題としてきたことですが、反差別ということが、階級闘争—反資本主義と切断されてきた歴史があります。反差別の運動をになうひとたちが個別差別の問題しか問題にしえない傾向がつよく、反差別というところで確立し得ないという問題があります。一方で、階級闘争—反資本主義を担うひとたちは、個別差別をほとんど対象化しえないのみならず、そもそも反差別という地平さえ、プロレタリア階級の問題しかとらえられず、繰り返し政治利用主義に陥っていく傾向があります。そのことは前項で書いたように継続的本源的蓄積論をとらえきれず、反差別と言うことの意味をとらえ返せてこなかった、そして階級支配の手段論から階級闘争至上主義に陥っていくことがあったとの負の歴史を総括しなければなりません。一方反差別ということが狭い意味での当事者の当事者性の問題に限定された活動になっていく、そこで他の差別が対象化されないということを生み出します。そののみならず、そもそも反差別という地平さえ確立できなく

なります。これは差別の構造というところをとらえ返していくことの必要性の問題です。とりわけ、資本主義的生産様式の中における差別のとらえ返しがなければ、反差別の立場が確立できなくなるのです。

さて、エコロジーの問題と反差別の切断の問題。これはスターリニズムの自然の法則としての自然弁証法が「史的唯物論」の基礎にあるということも含めた、エンゲルスも陥っていた反映論なり、決定論とかへの批判の問題です。それは反差別論では、差別の生物学的決定論から、差別はなくなならないというような主張につながっていきます。を生み出していきます。このあたりはダーウィン進化論の自然淘汰説ということから、競争原理の支配という差別の正当化に陥っていきます。

逆にとらえると、エコロジーの問題が歴史性・社会性の問題をとらえられないから、差別の問題をとらえられないということがあります。歴史性の問題というのは、自然という概念自体が歴史化された自然、自然化された歴史という相互性の中にあるということをとらえられないという問題です。もうひとつは、エコロジーということが他の問題と切断されたところで、相対化してとらえられないということです。

最後に反資本主義とエコロジーの切断問題です。これは、エコロジーが社会的なことをとらえ返せない、せまいところで運動を進めていくという傾向を繰り返し生じていたことの問題があります。そのことはエコファシズムといわれる自体さえ生みだして来ました。エコロジーということ、総体的関係性から押さえれば、そしていかなる社会を生みだしていくのかということ、総体的にとらえていけば、このあたりの壁を越えていける事ではないかと思えます。

これは逆向きのベクトルとしては、自然と社会という二元論というところから、しかも自然に対する支配、自然と闘うなりというところで、自然を支配するという錯誤を生みだしてきた歴史を押さえ得ます。

これを図にすると図3になります。

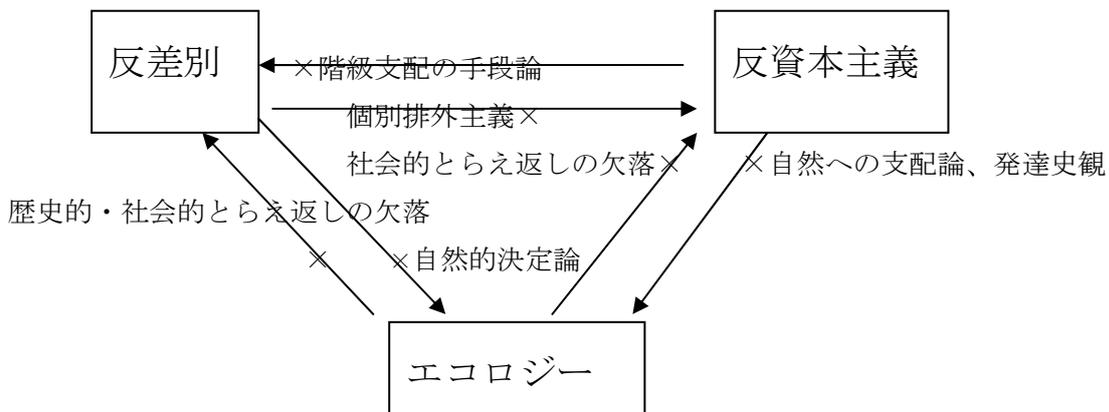


図3

そもそもまだきちんと学習していないことで、いろいろ書き綴っていくことへのためらいがあります。そして、図式化ということが物象化ということを生み出すなどという弊害があります。また、「視覚障害者」にとって図式化ということで説明していくと逆にわかりにくくなる、ということでためらいつつも、それはいろんな形で補足していくことを考えています。そのような思いの中で、あえて試みました。

まだきちんと煮詰め得ていません。議論のための叩き台です。

いろいろ批判をもらう中で、深化した「序説」を生みだし、原論、総論という形で展開していけたらと願っています。

(編集後記)

◆巻頭言の原発のことは、なぜ、そんなものが存在し得るのか、という思いがありました。だから、細かい学習や批判などしないでいました。推進派の主張は、非論理的文章の見本のような意見で議論の対象ではないとの思いがありました。政府・電力会社・マスコミの世論操作のようなことで、なぜ、そんな訳の分からない主張が通り・維持されているのか、どうしても理解できないことでした。今、考えると反対派のひとりひとりがきちんと言挙げしていかなかった、その事の中で作られた体制だったと、慚愧の念を抱いています。そのような思いの中で、学習を重ねつつ、文を書き連ねています。

◆松本復興相が、辞任しました。知事に対する発言が問題になったようです。知事との対談の映像が流れていましたが、上から目線の命令口調の発言です。わたしは驚愕しました。彼は、部落解放運動の父と言われた松本治一郎さんの孫です。部落解放同盟の役員もやっていたようです。部落解放運動は日本の反差別運動を牽引していました。それなのに、なぜ、反差別ということが考えの中にあるひとが、なぜ、あのような差別的態度がとれるのかと驚いたのです。

そもそも議員の世襲というようになっていったときに、反差別ということがあいまいになっていったのかもしれない。

そのことはそもそも、反差別運動や、階級という差別から発した左翼運動が総体的に陥ったことでもあります。

差別ということが総体的にとらえられず、自分の「個別差別」が差別ということを根源的にとらえられず、自分は差別されるのはいやだ、けれど他の差別は関係ないとか、差別する側になりたいとかいうところに陥って行ったのです。

反差別というところで、差別をなくすということで活動している団体が、プライドというところから抑圧的差別的なところに陥っていったり、どちらが上か下かの論理にとらわれていく、一体なんのための運動なのか忘れた、押さえられない活動になっていくのです。反差別ということは、どちらが上か下かみたいなどころ自体をなくしていく活動ではないでしょうか？ 差別の構造といえるようなところをとらえ返し、反差別という地平をきちんと押さえた活動が今必要なのだと思います。

◆というところで、反差別の三角形というところから、エコロジー問題とつながる反差別の論攷を出してみました。本文中にも書きましたが、まだ煮詰め得ていません。協同作業の叩き台としての論攷です。

◆読書メモがますますメモ的になっていっています。読書計画が、エコロジー関係に踏み込む中で、メタメタになってきています。しかし、わたしの論考の課題が、そして運動の方向性がより鮮明になってきました。しばらく、エコロジー関係の本を読み込んでいきます。間で、障害関係の本は挟んでいくことになります。

◆図書新聞に「書評」を載せてもらいました(14P 参照)。「書評」という言葉に抵抗を感じ始めています。「対話を求めた読書メモ」ということがフィットします。ひとりで論考を重ねても、新しいことはなかなか生まれません。対話こそが、何かを生みだし、あたらしいうねりを作り出せると思っています。もっと対話を求めて動き出したいと思っています。

反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>